

## 広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

スーパーバイザー  
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親である。



スーパーバイザーとして  
昨年夏、レクサスギヤラリー高輪で行われた  
キックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーガーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しくなるプロダクトか?」「地域のオリジナリティーはあるのか?」「コンセプトやターゲットは明確か?」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約一年の試行錯誤を経てプロダクトを紹介する。



試作品で焼き肉のテストを行った

「食卓に置くなら安全確保が欠かせない」とから、内側に断熱性と保温性の高い素材をはじめ込み、二重構造とした。完成ができたのは、プレゼンテーションの直前だったという。

金 寛美氏  
山形県／陶芸作家

1977年新庄市生まれ。98年東北芸術工科大学芸術学部美術科洋画コースを卒業し、同年青森県南部名久井焼で陶芸入門。2003年に新庄市升形で陶工房Noahを設立。10年からは舟形町で「舟形焼わかあゆ薰風窯」として活動中。1992年に同町で出土した国宝「縄文の女神」をきっかけに「縄文愛」が芽生え、縄文土器を現代に生かすプロジェクトも行っている。

国宝の土偶「縄文の女神」  
や全国の匠たちと交わり、作

バイヤーと商談中の金さん

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手掛け、くまモンの生みの親でもある小山薰堂氏を迎えた。隈研吾氏(建築家／東京大学教授)、エリヤ・ニコラ氏(デザイナー)、清川あさみ氏(アーティスト)、生駒芳子氏(ファッショニスター)、ナリスト／アート・プロデューサー)、下川一哉氏(意匠研究所)らをサポートメンバーガーに発足。第1回となる今は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52人の若き匠が選出された。

プロジェクトのスупーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手掛け、くまモンの生みの親でもある小山薰堂氏を迎えた。隈研吾氏(建築家／東京大学教授)、エリヤ・ニコラ氏(デザイナー)、清川あさみ氏(アーティスト)、生駒芳子氏(ファッショニスター)、ナリスト／アート・プロデューサー)、下川一哉氏(意匠研究所)らをサポートメンバーガーに発足。第1回となる今は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52人の若き匠が選出された。

## レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援



1月18日、プレゼンテーションにて

経てプロダクトを完成させた。1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足掛かり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこ

山形県の匠、金さんが製作した「縄文七輪（しちりん）」は、縄文土器をかたどった陶器製のしちりん。表面の模様は、山形県内で出土した縄文土器の文様をモチーフに、金さん流のアレンジを加えた。「笑顔」や「植物の息吹」といったテーマは、者みんなの心を温め、表情を和ませてくれる。

山形県の匠、金さんが製作した「縄文七輪（しちりん）」は、縄文土器をかたどった陶器製のしちりん。表面の模様は、山形県内で出土した縄文土器の文様をモチーフに、金さん流のアレンジを加えた。「笑顔」や「植物の息吹」といったテーマは、者みんなの心を温め、表情を和ませてくれる。



完成プロダクト「縄文七輪」

## イマ流縄文生活 満喫して



「縄文炎祭」の模様



完成プロダクト「縄文七輪」

商談会では店頭で扱つてみたい」というバイヤーや、「作品を花器として使いたい」という華道家から話が持ち込まれた。「県内産の炭や、お手入れキットのようなものを一緒に売りたい。火を楽しむ生活を提案することでこの地域のために少しでも役立ちたかった」という。金さんは舟形町から「縄文炎祭」が開催され、舟形時代の人たちが食べたと思われるメニューを再現するほか、縄文土器を作つたり、縄文時代の人たちが食べたとされる「縄文」を生かしたまちづくりが行われている。金さんはこうした活動に携わるうちに、縄文文化に触発され、自身の心の中にある「縄文」を實現しようと取り組んできた。『縄文七輪』のアイデアも、そうした中から生まれたものだ。

商談会では店頭で扱つてみたい」というバイヤーや、「作品を花器として使いたい」という華道家から話が持ち込まれた。「県内産の炭や、お手入れキットのようなものを一緒に売りたい。火を楽しむ生活を提案することでこの地域のために少しでも役立ちたかった」という。金さんは舟形町から「縄文炎祭」が開催され、舟形時代の人たちが食べたと思われるメニューを再現するほか、縄文土器を作つたり、縄文時代の人たちが食べたとされる「縄文」を生かしたまちづくりが行われている。金さんはこうした活動に携わるうちに、縄文文化に触発され、自身の心の中にある「縄文」を實現しようとしてきた。下川氏も、金さんの飛躍に期待を寄せる。「あなたの熱意、考え方をもっと世界に発信したい」と、舟形の土を使いつ、縄文文化に触発され、製作活動の大変な柱となつていった。

「注目の匠」に推してくれた下川氏も、金さんの飛躍に期待を寄せる。「あなたの熱意、考え方をもっと世界に発信したい」と、舟形の土を使いつ、縄文文化に触発され、製作活動の大変な柱となつていた。

「注目の匠」に推してくれた下川氏も、金さんの飛躍に期待を寄せる。「あなたの熱意、考え方をもっと世界に発信したい」と、舟形の土を使いつ、縄文文化に触発され、製作活動の大変な柱となつていた。

# 火を囲む楽しさを力タチに 「縄文の女神」の国から、縄文七輪

金 寛美氏 山形県／陶芸作家

品を目にすることで刺激を受け、「私の作品にはまだまだパワーが足りない。縄文土器が本来持つ力強さを、もっと入れ込まなければ」と新たな意気込みも生まれた。



作品をプレゼンテーションする金さん